

NO.97.2007.1.31.



「アートセロー」と「サレジオ学園」に
架かる虹の架け橋！

12月27日の夕方、ジトーミル市内の絵画教室「アートセロー」で、クリスマス恒例のコンクール受賞セレモニーがあり、私は「サレジオ学園からのクリスマスカード」を届けるため、参加しました。

集まってきた子どもたちは皆、お母さん手作りの衣装などで華やかに、それぞれ



が詩の朗誦や寸劇を披露、「ジッド・モローズ(ウクライナのサンタクロース)」も登場してのダンス、ご褒美をもらい華やかで楽しいセレモニーでした。

私も一言ご挨拶をし、サレジオ学園の生徒さんたちからのクリスマスカードを、ホステージ基金のジェニーヤさんと一緒に、手渡しました。皆、宝物をもらったように目を輝かせて、遠い国から送られてきたカードを、大事そうに手していました。

また、この日は、キエフの被災者市民団体に日本文化の一端を紹介するため、2001年の第3回スタディ・ツアータイ時に預けてきた「簡易茶道具」をキエフに持ち帰るというお仕事もあったのですが、せっかくなので、キリチャンスキーさん、ジェニーヤさん、ジャーナリスト連盟(ジトーミルシチナ紙)に勤めているグサクさん、ちょうど訪ねてきた奨学生オレーナ・ザイチエクさんにも一服飲んでいただき、しばし日本の時間を過ごすこともできました。

(戸村 京子/キエフにて)

〒466-0822 名古屋市昭和区樂園町137 1-10

チエルノブイリ救援・中部 代表: 市原佳代

郵便振替: 00880-7-108610

TEL/FAX: 052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail: chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ: <http://www.chernobyl-chubu.jp.org>

静岡サレジオ小学校の クリスマス会で感じたこと

12月23日、静岡サレジオ小学校のクリスマス会に、綾部さんと二人でお邪魔しました。毎年この会で、チェルノブイリの被災者へ心温まるプレゼントをいただいています。今年は、ナロジチの診療所で働く医師や看護師の往診用の自転車を買うための寄付金10万円です。ナロジチは、一人の医師が巡回する範囲が広いため、自転車があれば、一日に診察できる人数がぐんと増えます。このプレゼントは、ナロジチの住人たちにとってたいへん喜ばれることでしょう。また、後援会からも義援金5万円をいただきました。本当にありがとうございます。



静岡サレジオ小学校は、「アルミ缶集め」によるお金と、週に一度おにぎりだけのお弁当にして、おかず代を寄付してくださっています。育ち盛りの子どもたちが、週に一度とはいって、なかなかいっぱい食べられない辛さを味わい、その意味をみんなでしっかり考え、活動の糧にしてくださっていることが、チェルノブイリの被災者にとってどれほど心の支えになっているかということを、贈呈式のご挨拶のときにお伝えしたかったのですが、よい言葉が思い浮かばず、しっかりとお伝えできたかどうか、とても心配です。

ジトーミル（アートセロー）の子どもたちが描いた、静岡サレジオ小学校の皆さんへのプレゼントの絵画を、当日お持ちしましたところ、さっそく校長先生が、クリスマス会の途中で披露してくださいました。そのとき校長先生が「私たちの支援は、けっして一方的なものではないですよ」と話されました。「20年も前に、遠い国で起きた原発事故。その被災者支援に対する取り組みが、果たして本当に役に立っているのだろうか」という疑問は、必ず起きるものだと思います。しかし、断固たる意志で継続してくださっている懐の深さに、ただただ敬意を表するばかりです。

私たちは、静岡サレジオ小学校を始めとする一人ひとりの支援者の皆様に対して、「被災者の方たちの感謝と友愛の気持ちの大きさを伝える努力を惜しんでいいけれど」と、強く感じました。



私たちの活動は「届ける」と同じくらいに「伝える」ことが重要なんだ…。新鮮な思いになれたクリスマスを、どうもありがとうございました。

（市原佳代）

「X'mas カードキャンペーン」の

報告とお礼

皆様から届けられたX'masカードの発送作業は、昨年12月15日に、一日がかりで行われました。その後すぐにウクライナへと発送され、ウクライナ正教のクリスマスである1月8日には、子どもたちに手渡されました。

今年送り届けられたカードは、実に**1,745通**！ 担当した私も予想外の数でした。きっとウクライナの子どもたちに「事故後20年経っても、世界

手に取る「心が温かくなる」力強く書かれた「頑張った」などの言葉、嬉しい国で暮らす見知らぬ子とおもひへの思いやりが感じられた。一九八六年に起きたチエルノブリ原発事故で、名古屋市昭和区のNPO法人「チエルノブリ救援・中部」は、クリスマスカードを募集中。被災したウクライナの児童病院へ送っている。昨年末は約千七百通、代表の市原佳代さんは「現地の子に大きな勇気をもたらす」と感

目録

心の支援

る「心は分からなくても、温かい心は伝わります」と語る。事故から二十年、放射能に汚染された土壌の作物を食べたり、今も絶えず、先天的に被災した者はない地図など、市原さんによると、「記憶の風化が進む中、カドは支えようとする人がいたたまらない」と重々しく述ざして生きてこそ命をもつて、生き残るための内緒はあります。先に現地住民は、現地の子に大きな勇気をもたらす」と感

たいと考えています。最後に、今回このキャンペーンにご参加くださった皆様、発送作業に協力してくれたNたまの仲間たち、広報・イベント活動にご協力していただいたメディアの皆様、および各種団体の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。また来年も、ご協力ををお願いいたします。
(山田真嗣)

原発事故で苦しむ子励まそう

心こめ被災地にカード



アスレノブリの子どもたちに送るクリスマスカードをつくまるK-10のメンバー

～名古屋市中区の寺子屋会館で

市民団体「風化させぬ」

（写真）

（右）

（左）

<ミルクキャンペーン>

あけましておめでとうございます。2006年も終わり、新年を迎えました。今年も、引き続き、3月末までミルクキャンペーンを行っていきますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。

ここで、昨年4月～9月までにいただいた寄付金と、10月から行っているミルクキャンペーンへの寄付金の総計をお知らせします。

2007年1月17日現在、ミルク代として**900,311円**（団体8件、個人154件）のご寄付をいただきました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

現地へ贈るミルク代は、【ミルク代】と費目指定された寄付金だけではかなわれています。 Chernobyl 原発事故から20年経った今でも、支援を続けていただいている方々がたくさんいるということは、とてもありがたいことです。そして、嬉しいことだと思います。

また、ご寄付をいただいた皆様の中には、メッセージを寄せてくださる方もいらっしゃいます。その中から、すべてではありませんが、メッセージをご紹介させていただきます。

<メッセージ>

共に生きるのは大切なことです。

娘の子は母乳でした。でも、それが出来ないのは大変悲しいです。

家族6人で(寄付金を)出し合いました。

Chernobyl の子どもたちが、日本の子どもたちと同じように健やかに育つことを願っています。

ミルクを飲んでいた娘も中学生になりました。元気に育ってくれていることに感謝。2007年が、少しでも明るい年になりますように…。

当キャンペーンに寄せられた、たくさんの人たちからの募金です。 Chernobyl の赤ちゃんたちに安全なミルクを届けてください。よろしくお願いします。

…などなど。他にも、「わざかな寄付できません。」「お体に気をつけてがんばってください。」など、励みになるメッセージが届きました。

苦しみの中にいる人々を思い浮かべながら、「少しでも助けになれば…」という思いで何かをすることは、とても大切なことのように感じました。

皆様もお体に気をつけて、健やかにお過ごしください。ご協力、誠にありがとうございます。これからも引き続き、よろしくお願いいたします。

(竹内聰志)

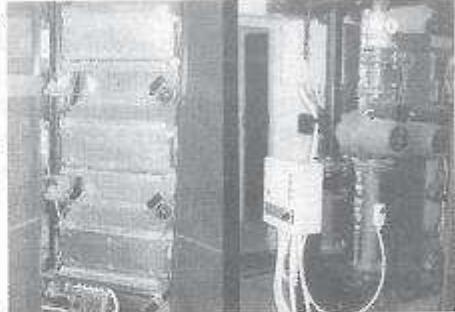
「カンパをありがとう！」

ボレーシュ 96 号(p8) でもご紹介しましたように、東京平和運動センターからの支援金により、ナロジチ地区中央病院のボイラー室復旧工事が完成しました。

日本よりも緯度の高いキエフより、なお北に位置するナロジチ地区は、冬になると樹氷が輝き、キラキラと美しいダイアモンドダストが舞うのです。でも、想像してみてください。病室でコートを脱げず、寒さに耐えてベッドに横たわる患者たち…。

今年は暖房が活躍し、暖かい病室で治療に専念する事ができます。病院スタッフも寒さに凍えた手で、注射器を持たなくとも良くなりました。本当にありがとうございました。

さっそく、感謝の手紙がナロジチ地区中央病院長から届きましたので、ご紹介します。(美)



<復旧工事が完了した
ナロジチ地区中央病院のボイラー室>

ナロジチ地区中央病院 第 737 号文書
2006 年 12 月 27 日

「 Chernobyl Relief - Central Region Operation Committee 」 御中

ナロジチ病院当局は、長年にわたるご支援に対し感謝申し上げます。

特に、**病院のボイラー室のためご提供いただいた 12,500 グリウナ（30 万円）** のおかげで、不足していた装置を購入することができ、冬期の運転に備えてボイラー室の準備を整えることができました。

当地区的保健行政、特に地区住民への医薬品供給のための予算が不足していることから、皆様の医薬品支援により、入院病棟の患者、またある程度は村落部の医療施設の医薬品の供給を補うことが可能となっています。

当病院に対して、地区から出る 2007 年度予算は、160 万グリウナですが、実際には職員給与だけでも 190 万グリウナが必要なのです。つまり、この予算では、病院の 2007 年度の必要経費の 10 ヶ月分にしかなりません。

(訳注：直訳。「160 万グリウナでは、職員給与の 10 ヶ月分にしかならない」との意味だと思います。)



心より感謝申し上げます。今後も協力が続きますよう期待しております。 敬意を込めて

ナロジチ地区中央病院院長 AA テプリツキー

よかったです！

奨学基金事業…現地の声

1999年から始まった奨学基金事業は、今年で8年目を迎えます。すでに、この事業最後の奨学生も決定しました。この事業を現地で支え、そして推進してくれた「ホステージ基金」のキリチャンスキーさんとドンチェヴァさんのコメントと、今年採用になった2人の奨学生の作文をご紹介します。

＜キリチャンスキーさん＞



基金の設立に対して、2つの面で感謝している。一つは、実際に苦労している被災者の学生達の支えになったこと。もう1つは、ホステージ基金の我々が、当地の若者や支援に対する人々の態度について、よりよく理解する助けになったこと。

奨学基金設立当初には、奨学生たちはホステージ基金の事務所によく来て自分達の問題も話し、我々も親身になって面倒を見た。卒業し就職した後も、結婚式に招待されたこともあった（妻が入院中で行けなかつたが…）。

医科短大の奨学生だったオクサーナ・イヴァンチェンコ（現姓ロマノヴァ）は、結婚後もナロジチの保健所で働いている（3歳の息子は、ナロジチ町の幼稚園に通園中）。一方、火傷した子どもの治療費を支援したアンドレイ・ノーリクは、その後しばらく音信もなく、昨年10月に本基金に来て、「ジトーミル市で運転手の仕事をしているが、よりよい仕事はないか」と相談をされた。その後また、音沙汰がない。その他、卒業後地元の汚染地域で働き、ジトーミルかキエフに行った人もいる。

奨学基金の制度自体は、五段階評価の五をつけても良いと思う。昨年採用の医科短大のオリガ・ボリヴォダは、最初の奨学金をもらった後、ナロジチの1グリブナキャンペーンの寄付金をホステージ基金の事務所に持ってきた。国立大の卒業生ヴァティム・シンガエフスキイは、卒業後汚染地域で就職先を探していたが、最低賃金程度の仕事しかなく、結局外国（テンマーク？）に出稼ぎに行った。こういう人も責めるつもりはない。一般的にいえば、汚染地域の学校や診療所で働いている元奨学生が多い。

元医科短大生のフェリクス・クルイヌイチコは、今もボレタツア歯科アカデミーで奨学生だが、事故処理作業者の父が病気になり亡くなったとき、ホステージ基金や日本の滝さんが支援した。今もホステージ基金と交流があり、滝さんが彼の娘に誕生日や正月にプレゼントしている。

＜ジェニヤさん＞



自分としては、汚染地域で就職しなかった人を責める気はない。一般的な話として、村落部の若い人は都市で就職したがる傾向がある。個々の奨学生とのコンタクトは、キャッシュカード払いにしてから少なくなった。以前は、救援・中部の代表団やスタディ・ツアーの折に奨学生との触れ合いがあったが、この頃はそれがないので、ホステージ基金が奨学生の集まりを呼びかけても集まりにくい。



<フィチキウスカ・ヴィクトーリヤ・ヴァレーリイヴナさん（ジトーミル国立農業生態学大学）>

Chernobyl...悲劇の日から20年が過ぎましたが、その与えた被害は、年々、より強く感じられるようになってきています。孫の顔を見ることなく、子どもたちを葬らなければならなかつた母親たちの悲しみや、両親を亡くした子どもたちの悲しみは、筆舌に尽くせません。

この20年間、恐怖・苦しみ・涙・痛みと絶望が、私たちから離れることはありませんでした。

私は事故の後、1988年に、ボレーシュ地方のジェレウ川のほとりにある、絵に描いたように美しいジェレフツイ村に生まれました。しかしその1年後、私たちはロシアの極北地方のモリルスク市に移住しました。当時みんなが、特に小さな子どものいる若い人たちは、汚染地域から移住していました。でも、そこで1年も過ごすことなく、私たちはウクライナに戻りました。私は覚えていないのですが、母の話では、5月9日[の勝利記念日]に、TVでキエフの軍事パレードが映り、フレシャトウイク通りではカシタンが花開いていましたが、モリルスクではまだ寒さが厳しく、大きな雪だまりができていて、母は故郷をなつかしむあまり泣いてしまい、私も、母が泣くのを見て泣いていたということです。

ウクライナに戻った後、私の健康状態がよくないので、私たちは故郷の村に住むことができずジトーミル市に引っ越し、今もそこで暮らしています。村には祖母が住んでいて、私はよく彼女のところに行きますが、そこでも Chernobyl は己の存在を忘れさせることができません。ガンですでにとても多くの人たちが亡くなっています、非常に多くの人たちが病気になっています。

Chernobyl 原発という名前と、ウクライナ語ではボルィニと呼ばれる Chernobyl ニク(にぎよもぎ)の草との間に、どういう関連があるのか私は知りませんが、でもなにか関係があるのでしょう。その草は祖母のいる村にも生えていて、その味は、Chernobyl 事故で被災し、これからも何世代にもわたって被害を受け続ける、何百万人の人たちの生活と同じように、苦いものです。

(2006.11.13)

<ムイハルチク・オレーシャ・アナトーリイヴナさん（ジトーミル国立農業生態学大学）>

すでに涙は枯れ、それでも心は泣いている。

私の Chernobyl 、私の Chernobyl 、

私の Chernobyl ...

Chernobyl の惨事は、その破滅的な痕跡を長くウクライナに残しました。一般的に、エコロジーの状況は顕著に悪化し、長期にわたって数百万の人々の健康が悪化し、深く重い悲しみが彼らの心にしみ通りました。

ウクライナのみならず、他の多くの国にも、さまざまな形で影響を与えた悲劇の後、すでに20年以上が過ぎました。この悲劇は、私の家族をも避けては通りませんでした。私の母は、オブルチ地区的ルィフスキ・ロマーネイという村に生まれ、青春をそこで過ごしました。ウクライナの他の地域と同様、大地のこの一角にも、自然は惜しみなく美しさを与えました。その美しさのすべてを、私は、小さな故郷の思い出として母の手元に残っている、古い写真の中でしか見ることができます。毎年、事故の記念日に、私は母の目に涙が浮かぶのを見、自分も思わず泣いてしまいます。ほとんど毎年、私たちは母の生まれた村に行きます。村がどんなに変わってしまったことでしょう!!! かつてあんなに美しく、ふんだんに収穫を与えてくれた果樹園は荒れ果てており、庭には雜草がはびこり、建物は廃屋になっています.....。今、村は「強制移住区域」と呼ばれており、そこに入るためには、身分証明書を提示しなければなりません。

この惨事の原因と結果については、さらに大変多くのことを語ることができます。しかし、残念ながら、今となってはその結果を変えることはほとんど不可能です。そして、私たちはこれからも生き続け、Chernobyl 原発が私たちに残した「遺産」と闘っていくかなければなりません。

(2006.10.15)

種蒔きの春がやってきた！

現地打ち合わせに行って来ます！

長野県南箕輪村 原 富男

新年おめでとうございます。「ナロジチ地区再生/菜の花プロジェクト」のスタート、種蒔きの春がやってきました。今年は、4月の種蒔きに始まり、秋には収穫・保管まで行います。ナタネの栽培と並行して、一方では、



バイオディーゼル燃料（以下 BDF と略）の製造装置の設計に取りかかる年になります。いよいよ計画が具体的に動き始めます。そこで、種蒔き直前のウクライナに打ち合わせに行ってきます。今回の訪問者は放射能汚染土壤の浄化担当：河田昌東さん。BDF 製造装置の設計者「伊那谷菜の花楽舎」理事の前沢功さん、メタンガスと荷物持ち担当の原富男の3名と、現地で合流するのは留学中の戸村京子さん、キエフ駐在員で通訳の竹内高明さんです。1月 21 日～31 日までの旅程で、現地には8日間滞在の予定です。

現地では、州行政の農業担当者と、プロジェクト全体や安全に保管されなければならない低レベル排出物の保管場所について話し合い、農業生態学大学の担当者と、ナタネの栽培と測定・実験方法について話し合い、ナロジチ地区行政とは、ナタネ栽培の畠を決め、BDF 製造装置とメタンガス装置の設置場所を決め、更に菜の花プロジェクトの現地責任者を決めることになります。

A. 土壌浄化について…①タネの種類を決め、②播種の時期（春蒔き→秋収穫・秋蒔き→春収穫）と方法（機械・手蒔き）を話し合い、収穫用コンバインの手配を相談します。また③畠の場所は、できるだけ BDF 装置の近く（運搬の効率）で、放射能汚染値 5～10 キュリー／Km² の条件に合う場所を探して決定します。更に④土壌と菜の放射能測定の方法と場所を決め、一番大切な⑤現地菜の花プロジェクトの管理責任者と作業者を決め、⑥菜種栽培における被曝防止（土壤粉塵やナタネ屑の吸入による内部被曝の防止—防塵マスク・帽子・着衣・作業者の体内被曝の測定）についての話し合い。今後の計画の資金を確定するために、⑦費用を調べてきます（土地・建物・機械・賃金・測定料など）。

B. BDF について…BDF を製造するに当たって必要な①薬剤の入手方法と金額を調べます（メチルアルコール・水酸化ナトリウム・酢酸）。また、②洗浄水・電気・精油・灯油・リトマス試験紙などの金額を調べ、現地の法律に沿ったプラントにするために、③現地の許認可に関する法規を調べ、④製造担当者の人件費と教育、⑤現地の気象（気温・湿度・天候）、⑥建物の使い方、⑦搾油機械と搾油場所、などについて調べてきます。

C. メタンガスについて…原材料の搬入がしやすく排出汚泥を搬出しやすい①醸酵槽排出槽の設置場所や保温方法を考え、②菜の茎葉根（投入原料）の保管場所を考えます。③投入原料の加工（チップ化）や堆肥化する場所もできれば屋内に作りたいので、使える建物を選ぶことになります。更に、④ガスの使い道もガスのまま使うのか、それともガスを使って発電するのかも相談します。また、実際に工事をすることをイメージして⑤業者を入れるか・自力プラス現地住民か？も考えたい。物資不足のナロジチ地区で、施肥機械やコンクリート・鉄筋・型枠など、材料が手に入るのかも事情を聞きたい。菜の花プロジェクトで一番大変な問題は、⑥排出物の乾燥方法・場所と、⑦最終排出物（放射能を含む）の保管方法と場所であり、州の担当者としっかり話し合いたい。尚、菜の花プロジェクト以外には、予算の関係で通常2月に行われる「次年度の計画や予算」を話し合う代表団の役割も兼ねることになります。また、被災者団体代表との話し合いを行うとともに、東京平和運動センターの皆さんの資金で完成したナロジチ病院の医療とチャーチが食品の資金提供をしているナロジチ町内の幼稚園も訪問する予定です。

とにかく、両肩に背負った荷物（お仕事）は、今回も重いのです。

(4: ウクライナのバイオエネルギーの現況)

私たちのナロジチ再生計画がいよいよスタートする。今年の春には、ナロジチの荒野に菜の花のタネを播く。当初の規模は 4ha と小さいが、ここで様々な実験を重ね、本格的な地域再生への道を作りたい。そのウクライナの現況はどうなっているのか調べた。

● ウクライナはバイオエネルギー・ラッシュ

1 年前には想像もしなかった事態が今、ウクライナで進行中である。ウクライナ国内でも、また、ドイツやイタリア・アメリカなど西側諸国からも、ウクライナの菜種を中心としたバイオエネルギー計画が次々と公表されている。過去数年間、ウクライナでは菜種栽培が盛んになってきた。ドイツをはじめとする EU 諸国へバイオディーゼル原料として輸出し、外貨を稼ぐためである。現在は 20 万 ha で菜種が栽培され、2005 年には 28 万 t が収穫された。栽培技術が未熟・肥料がないなどで、単位収量は少なく、今後の改善が必要とされている。栽培はほとんどが、リボフ・フメリニツキー・テルノポリといった西側に近い州で行われ、中央部に位置するジトーミル州南部でも、全体の 2% が生産されている。ここに来て、ウクライナ国内での菜種ディーゼル燃料製造計画が活発になっている。輸送コスト削減とウクライナの安い労働力が、西側諸国の魅力である。「隣国オーストリアの企業は、大型プラントをボルタヴァ州とジトーミル州に計画し、行政と交渉中」と昨年末発表された。年間 10 万 t の生産を目指している。同じ頃、「ドイツの企業が、ハリコフ州に大型バイオディーゼルプラントを計画し、7 千万ユーロを投入する」と報道された。2008 年には建設するという。私たちが計画しているジトーミル州ナロジチ地区の隣のオブルチ地区は、これまでも菜種栽培をしてきたが、今新たにバイオエタノール工場の建設を計画中である。ウクライナ政府は、ガソリンにエタノール混合を義務付ける法案を準備中で、それ

によれば、2007 年度中に 2% 混合、2009 年には 4% 混合を義務付けるという。エネルギー資源のないウクライナ政府は、バイオエネルギー推進に大きな期待をもち、国家的推進を目指している。

● ウクライナは菜種栽培の適地

ウクライナのバイオエネルギー推進には根柢がある。EU 諸国に近く、広大な農地があることである。環境先進国ドイツでは、すでにディーゼル車の 2% が菜種ディーゼルで走っているが、国内での菜種栽培は飽和状態で、土地がなくなっている。一方、ウクライナは 60 万 Km² の国土の 70% が農地で、全国で菜種栽培が可能である（日本の耕地面積は 48,000 km²）。試算によれば、ウクライナの菜種生産能力は、年間 700 万 t である。ウクライナは、ウラン以外に有効な国産エネルギーを持たず、「将来のエネルギーは、バイオしかない」とウクライナの専門家も指摘している。最近「ウクライナのバイオディーゼル」という市場調査会社の本も出版され、バイオディーゼルへの期待は高まっている。

● ナロジチ再生計画に支援を

私たちの計画のユニークな所は、放射能除去とバイオディーゼル・バイオガス生産を一体化させ、汚染地域を復活させる点にある。もちろん、ウクライナでも唯一の計画である。

フォローの嵐は吹いている。足りないのは資金だけである。皆様の支援を仰ぎたい。

（河田）

キエフ留学日記—終了編—（戸村京子）

<ウクライナ語習得とフィールドワーク>

キエフ大学では、ウクライナ語を学びに来る留学生が少なく、殆んどがロシア語希望のため、クラスが成立しないなど苦労しました。

私の第一目的は、ウクライナ語習得でしたが、そのほかにキエフのチャルノブイリ被災者団体に出入りし、話を聞かせてもらったりと、活動を見せてもらったりと、フィールドワークを行いました。そこで、ウクライナ語で話すことを助けてもらい、また個人的な交流でも、いろいろ暖かい心に触れることができました。

ソ連時代にはロシア語が公用語で、ソ連崩壊後はウクライナ語へと変わったわけですが、彼らは、話すことは別にしても、聞くことはバイリンガルです。子どもたちは、学校でウクライナ語による教育を受けているので、将来はウクライナ語へ移行していくのでしょうか。これは民族的な、また政治的な意味合いもあり、時間がかかる問題でしょう。

後半のセメスターでは、ドイツ・チェコ・オランダ・アメリカからウクライナ語を学びに来た学生もいて、状況は少し良くなりましたが、実質 10 ヶ月間でロシア語の半分の授業しか受けられず、残念ながら未だ習得には至っていません。

<ウクライナの EU 加盟はいつ?>

ウクライナでは、種々の手続きで苦労しました。何事も一度では済まず、3~4回足を運ばねばならないのが、常識（？）でした。

また、公共交通も悪く、バス・トロリーバス・市街電車には時刻表がありません。いつもわからず、私たちは、定期券のあるバスを 40 分ぐらい待つこともしばしばでした。たまにしか来ないので、また恐ろしく込み合うのです。

トイレ事情も、良くなってきてはいるものの、まだ快適には遠いものです。タバコの吸殻はポイ捨てするのが常識（？）で、毎日の道路掃除の仕事が大変です。ツバのはき捨てで罰金を取られる国もあるのに、これも普通のことです。

そこで、ウクライナ語をともに勉強している、EU 圏からの留学生との会話で、「ウクライナは、現在 EU 加盟を希望しているけれども、それはいつ可能か？」という話題の結論は、「10 年後？」、「いやいやもっと！」と口を揃えての意見でした。

<人は皆親切で>

ウクライナでは、システムはまだ問題が多くあるものの、出会った人は皆親切で、多くの人びとに助けられました。それには本当に感謝の意でいっぱいです。

今、ウクライナでの「滞在登録」と寮滞在の問題で、チェコに一時出国中なのですが、ここまで来るのにも多くの人に助けられました。滞在するペンションの向かい側にある聖母マリア教会の中で、私はクリスチヤンではありませんが、出会った人々のことを思いながら、感謝をささげました。

（チェコ・モラビア地方クロムニジェシュにて）



7年間の医療支援活動を振り返って

NGO国際医療協力プロジェクト副理事長
(星城大学医療マネジメントコース准教授) 北野 達也



私は、「切尔ノブイリ救援・中部」と関わり、今年で8年目になります。2000年の医療専門家派遣事業により、私達の活動は始まりました。現状把握のための医療施設見察の際、財政難・入手困難により薬剤の不足、医療消耗品・部品の不足、また、生命を維持するための医療機器の絶対数が不足し、その上、故障した医療機器の修理費用なども無く、その結果、それらの医療機器が使用できずに、亡くなっていく患儿も少なくありませんでした。

現地では、病院幹部職員からの意見だけではなく、直接治療に携わる現場スタッフの意見も聞くため、私自身、医療現場に入り、現地スタッフとともに、呼吸療法（肺理学療法や気管支喘息発作の治療）や血液疾患に関する治療法などの技術移転、生命を維持するための医療機器の操作や保守・点検・修理などの実務もこなしてきました。

しかし、私達が日本から頻回に渡航し対処することができず、継続支援のあり方として、救急救命のための治療や医療機器の急な故障にも対応できるよう、病院内看護師スタッフに技術移転、さらには自国にて自立すべく、現地で生命を維持するための治療や医療機器製作、および、保守・点検、修理のできる日本の「臨床工学技士・厚生労働省国家資格」のような人材（現地では、准医師＋エンジニアの業務内容に該当）育成を目指しました。その中、アンドレイ・ポスタヴェンスキイ氏（シトーミル州立小児病院准医師）、そして、シトーミル市立小児病院エンジニアであるヤン氏・セルゲイ氏の2名を高度医療専門職に位置づけるべく、人材育成を試みたものの、現地では、病院内で常時必要とされるわけではなく、パートタイムであり、低賃金のため転職する者もいました。そこで、アンドレイ氏が留学した国立シトーミル技術工科大学（技術者養成）とシトーミル州立医科大学短期大学（准医師養成）において、「生体機能代行装置学概論」「医療安全管理学概論」「日本の医療制度及び日本の臨床工学技士について」などの特別講義を行い、高度医療専門職養成試みましたが、講師や業務内容に興味はあるものの、冷遇により離職として自指す者はほとんどいません。さらにウクライナには、医療機器修理専門のメンテナンス会社もあり、病院内で常勤の必要性もありませんでした。

シトーミル州立小児病院・シトーミル市立小児病院等において、医療機器の複雑な電子基板の修理などを行っても、冬場は外気との温度差で結露ができ、使用環境の問題で短期間の部品の劣化もあり、トラブルが絶えません。通常は、10年もつ医療機器でも、5～7年程度しか動かせないものもあります。

7年間の医療支援活動の結果を踏まえ、医療機器修理技術者を養成し病院内に配置するよりも、病院内において継続的に財源を確保し、必要とされる治療の拡大や医師・看護師などの人員確保、医療機器の継続的な更新申請など、院内でやりくりをする医療経営や医療管理の専門家（欧米では病院管理者として既に存在します）を育成し、継続運営していくことが重要であり、それが、現地医療施設の改善、医療の質の向上のための近道と考えました。

今後は、州立小児病院・市立小児病院・地区病院等においても、安全で質の高い医療提供ができるよう、医療マネジメントの手法を伝授したいと思っています。

また、国立シトーミル技術工科大学においては、寄附講座を設け、既存の附属医学研究所で、医療機器・医療関連商品開発などの若手研究者育成・研究助成、奨学生制度なども設け、自立のための医療支援を促したいと考えています。このことは、切尔ノブイリ原発事故被災者、小児病院に入院する重症疾患の子ども達を救うだけでなく、その子ども達が、将来、自国で自立できるプロジェクトになると考えております。

昨年1年間、現地に対して積極的な医療支援活動はできませんでしたが、この間、現地スタッフと支援する私達の間で、考える時間が与えられたように思います。今後も「切尔ノブイリ救援・中部」と協力し、現地のニーズも踏まえた上で、病院マネジメントを視野に入れた継続的な医療支援活動をしていきたいと考えています。

「切尔ノブイリ救援・中部」とともども、皆様の温かいご支援を、よろしくお願いいたします。

事務局便り

新しい年 2007 年がはじまりました。昨年も皆様から、尊いご寄付・ご支援・ご協力をいただき、ありがとうございました。そして、2006 年度のミルクキャンペーン・カードキャンペーンでは、N たま研修生の山田さんや竹内さんの熱心な広報活動とひたむきなご努力のおかげで、長年ご協力いただいている皆様に加えて、新たに多くの方々からご厚意をいただき、また、発送作業も若い N たま研修生の皆さんに手伝っていただきました。「こうした皆さまの温かい想いは、必ず被災者の方々の心に届いています」と思っています。若さの活気あふれるパワーと、こころの温かさを感じた 12 月でした。また、12 月 23 日には、静岡サレジオ小学校のクリスマス会にお招きをいただき、代表の市原さんと行ってきました。長年のご支援に感謝をしながら、クリスマスの厳かな会場の雰囲気の中、舞台では清らかな歌声と、素直に精一杯演じている子ども達の姿に、これまでに味わったことのない感動を、経験させていただきました。今年は、ナロジチ地区診療所の自転車代 10 万円と、保護者の方々の後援会から、ミルク代 5 万円をいただきました。早速、1 月 21 日に出発した「ナロジチ再生/菜の花プロジェクト」の派遣調査団に託して、現地へお届けいたしました。

さて、今年は十二支最後の「亥」ですね。過去を確認して、新しいことへのスタートをきる年だそうです。亥年の「亥」は、時を刻む時刻の「刻」という字の中にあり、コツコツ幸運を積み重ね、時が繋がっていくように過去と未来のつながりを大切にして、未来の新しい夢への種まきをするのだとか…。そういう意味でも、昨年 9 月に始動した「ナロジチ再生/菜の花プロジェクト」の成功を、是非にと急じています。今年も皆様、どうぞよろしくお願いいたします。ちなみに今年のラッキーカラーは、「ライトグリーン(新芽の色で未来に向かう)」「オレンジ(幸せを引きあげるパワー)」「ゴールド(厄をはねのけ、タイミングをつかむ)」だそうです。

(綾部)

編集後記

☆納豆を快適に食べたいとの願望から、年明けに納豆をかきませるのに最適な大きさの食器を買った。
しかし納豆が店頭から消えた。犯人は「あるある大事典」。せっかくの食器の出番がなく、しょんぼりすること数日、捏造事件勃発。ようやく納豆を GET。めでたしめでたし。
(佳)
☆先頃、聞かずの間だった 2 階の部屋を片付けた。不用品の山…さっきまで大事な物だと思っていたんだけどな。また、編集作業を行う事務所が、整然と片付けられてきれいだ。取材に訪れる方々にもきっと好印象だと思う。やっぱり生活環境はきれいが良い。そう! 継持する事が大切だよね~。
(美)
☆「9.11 テロは、米政府の自作自演!」…調べれば、調べるほど、疑惑が確信に変わっていく。
「世界貿易センターのツインタワーと第 7 ビルは、爆弾で破壊された」という証拠。「ペントゴンに、ボーリングは突入しなかった」という証拠。「ユナイテッド 93 便からは、携帯電話がつながらない」という証拠。「米政府関係者は、9.11 が X デーであることを事前に知っていた」という証拠。「名指しされたテロ実行犯の多くが、現在も生きている」という証拠。…数えあげればきりがない。
自衛隊のイラク派遣を真っ先に決定し、米政府に追従した日本政府も、知らなかつたではすまされない。私が「9.11 の真相究明」にこだわる理由は、「戦争に反対する人々」「憲法 9 条を守る人々」「脱原発を求める人々」「地球環境の保護を願う人々」、そして「ボランティア活動を愛する全ての人々」にとって、人生觀を変えてしまう出来事だと信じているからである。
(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波音町 20-14
印刷 「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473
E-mail : a-pri@peach.ocn.ne.jp